



偉大なるもの人間の叡智

教育学部 教育学科教授
教育学部長

山本 博資

縄文期、大阪の上町台地は海と陸が交わる場所であり、そこは異界と現世の境と言われた。釈徹宗は、その二つの世界の交流できるゲートの一つが四天王寺であり、中世、四天王寺の西門は夕陽を見つめる「日想観」が行われた場所であったという。西門は彼岸の日没線上に建てられている。近年、その「日想観」が復活された。今は、西方には海が迫っていないが、夕陽丘という地名の由来通り上町台地の夕陽は格別である。

20年前、「沖縄戦の図」で名高い宜野湾市の佐喜真美術館を訪れた。館長が最後に美術館の屋上に案内してくださった。美術館の屋上を見ろとはとんだ館長ですねと笑いながら案内されたのは、夕陽に向かう階段であった。6月23日の夕陽が真正面に沈むように建設されていた。

もっとも美術館の先は、西方浄土の海ではなく米軍普天間基地が広がっていた。近い将来に返還されて海が見えるようにとの願いがその階段に込められている。

新旧の建築物に込められた想いは偉大である。人間の叡智の偉大さを感じている。そんな思いで、いま四天王寺大学で若い人たちとともに学ぶことに感謝している。

古代インドの人々の偉大さは、紀元前2世紀ころ、人生を「学生期」「家住期」「林住期」「遊行期」と分け生き方を示唆する思想を生んだことだ。山折哲雄は、釈迦の学生期は16歳、家住期は29歳、林住期は35歳、遊行期は35歳から80歳の入滅までという。親鸞は叡山をおりた29歳までが学生期で、その後60歳まで家住期であるという。そんな偉大な宗教的人間と比べるべくもないが、平凡な一人の人間として意識的な人生を共通の地点から考えることが大切だと思っている。

学生期はインキュベーション (incubation 抱卵) 期である。自力で次の時代に進まない限り家住期はこない。四天王寺大学は、まさに啐啄同時である。若い人たちが、人間の叡智の偉大さに触れ、人間と人生を自ら開花していくことを願っている。



文化の共有 — 普陀山と惠尊法師

人文社会学部 国際キャリア学科准教授
仏教文化研究所研究員

李 美子

中国で四大仏教聖地の一つとして知られる浙江省の普陀山には日本と深くかかわりのある伝説があります。それは「不肯去観音」菩薩の伝説で、「不肯去観音」は「行かず観音」を意味しています。

この伝説によると、日本の平安時代の僧・惠尊が中国の五台山で観音像を入手され、船に載せて明州（今の浙江省の寧波）から東へ、日本に向かって出航しました。ところが、船が普陀山の沖にさしかかったところで、嵐のために座礁して動けなくなってしまいました。惠尊はこれを観音菩薩の「東に行かぬ」というお告げだと考え、早速観音像を抱いて近くの普陀山の潮音洞の岸に上がりました。この島に住む張氏はこの成り行きを見て感激し、自分の家を提供し、そこに観音像を祭

るようになりました。そこでこの観音像は「不肯去観音」（行かず観音）という名を得て、また、この観音像を祭るお寺は「不肯去観音院」と呼ばれ、普陀山観音霊場の開山寺院となったのです。こうして惠尊法師の物語は「不肯去観音」菩薩の伝説とともに後世に代々伝わってきました。

今も普陀山には「不肯去観音院」というお寺がありますが、このお寺は1980年に普陀山に観音像をもたらした惠尊法師の事績を記念して、日本のお寺からの協力を得て建てられたようです。お寺の長廊には日本各地のお寺から33体の観音像が奉納されています。このように古代から現在に至るまで普陀山の観音霊場は日本の観音信仰とのかかわりを深く持ち続けています。

観音菩薩の慈悲の心は現在でも国境を問わず、人々の心の支えになっていると思います。どの時代でも観音菩薩の慈悲の心は人々が未来へ向かう上での希望となり、また、相互に学び、互いを気遣い、平和を信じる心をこの観音菩薩から学ぶことができるのではないのでしょうか。

❖ 利他の精神

仏教文化研究所
客員研究員
桃尾 幸順



利他というのは他の人々に利益を与えて助けることで仏教においてはとても重要視される修行です。仏教において利他は自分の利益になる行いである自利とともに自利利他と表現されることも多いものです。

この自利利他には二つの解釈があります。一つは自利+利他という考え方では自利の修行によって自分を成長させてから利他を行っていく、あるいは自利と利他を別々に行なうという考え方です。それに対してもう一つの解釈は自利=利他という考え方、自利が同時に利他の修行になり、利他が同時に自利の修行にもなるという考えです。後の解釈は特に大乘仏教において発展した考え方、聖徳太子もその著書である『勝鬘經義疏』の中で後者の自利利他を説いておられますので、ここではその聖徳太子の自利利他を説明させていただきます。

聖徳太子は『勝鬘經義疏』の中で自利利他とはほぼ同じ意味を表す言葉として自行化他という言葉を使っておられます。自行化他とは自分の為の修行と他者を教化し利益を与えるという意味の言葉で、自利利他が結果的に得られる利益に焦点を当てた言葉であるのに対して、自行化他は行為に焦点を当てた言葉になっています。この自行化他は『勝鬘經義疏』の中の十大受の解説部分で説かれています。「勝鬘經十大受」は四天王寺大学の聖典聖歌集の23～24ページに書き下し文が掲載されています。聖徳太子はこの十大受を三つに分けて、一から五受を撰律儀戒、六から九受を撰衆生戒、十受を撰善法戒の実践のあり方とされているのです。

撰律儀戒というのはすべての戒律を守っていく戒めという意味ですが、聖徳太子は第一受が戒律を破ろうとする心すなわち悪いことをしようとする心を起こさない、第二受は目上の人に対して慢心を起こさない、第三受は目下の人に対して怒りの心を起こさない、第四受は他者あるいは他者のものに対して嫉妬心を起こさない、第五受は自分あるいは自分のものに対して物惜しみの心を起こさないことだと説明しておられます。そしてこれらは自分を成長させるための自行であります、同時に他者のための化他にもなっていると説かれています。悪行、高慢、怒り、嫉妬、物惜しみは自分を傷つけ苦しめる行為なのですが、同時にこれらは相手のある行為なので、もし行ってしまうと相手を傷つけ苦しめることにもなってしまいます。ですからこれを行なおうとする心を起こさないことは自分の為の修行であると同時に他者の利益にもなる行為だということです。

撰衆生戒というのはすべての人々を助け利益を与えていく戒めという意味ですが、聖徳太子は第六受が楽しみを与える、第七受は楽しみの原因を与える、第八受は苦しみを抜く、第九受は苦しみの原因を抜くことだと説

明しておられます。楽しみの原因を与えるというのは例えば知識や技術を教えることは、その時点では楽しくないかもしれませんが、将来楽しみや幸せにつながるということです。苦しみの原因を抜くというのは例えば悪いことをしようとするのを止めることは、将来その人が罰を受けたり後悔したりすることを防ぐことになるということです。仏教では原因も含めて楽しみを与えることを慈、苦しみを抜くことを悲とし、あわせて慈悲と言っています。聖徳太子はこのような慈悲の行いは化他であると同時に自行でもあると言っておられます。困っている人を助けてあげることは、自分も満足し、人間的に成長することができますし、友人に勉強を教えることも、自分の知識を定着させ学力を向上させることができるからです。

ただこの化他が自行になるという考え方は、とらえ方を間違っていると危ういことがあります。先ほど述べたように、自行化他は自利利他と言い換えることもできます。だから自利のために利他を行おう、すなわち自分の成長や満足のために他者を助けようとする、それが叶えられないときに不満を感じてしまうかもしれないのです。

比叡山を開かれた伝教大師最澄に「忘己利他」という言葉があります。これは自分の利益は一切考えずに利他を行うという意味の言葉です。これは一見自利利他の精神に反しているように思われますが、自分を意識しないで利他を行うことこそ結果的には自分の成長につながり、満足にもつながるのです。

撰善法戒というのはすべての善を行うということですが、聖徳太子は第十受の撰受正法がそれにあたるとされています。撰受正法は正しい教えを受け入れるという意味で、仏教などのさまざまな教えを理解し、それを忘れずに保持するということです。聖徳太子はこの撰受正法こそ善であり、自行と化他を同時に実践する行いだと説かれています。自行にとっても化他にとっても、正しい教えを学ぶことが前提となります。ただ何が正しいか間違っているかを判断することは難しいことです。正しいと思っていたことが後で間違いであったことに気づくのは珍しいことではありません。正しさを実証するためには時間と空間の裏付けが必要になります。そういう意味では仏教やキリスト教のような世界宗教は長い時間と多くの人々によって正しさを裏付けられているということが出来ます。聖徳太子も十七条憲法の第二条で、仏教は古くから多くの人々に実践されているからこそ素晴らしいのだと述べられています。

このように悪心を起こさないことも慈悲によって他者を助けることも正しい教えを受け入れることも皆自行化他につながっています。その中でも他者を助ける利他行が相手だけではなく自分の為にもなるという考え方は今回のテーマの中心となる話です。仏教における利他行は自分を犠牲にして他者を助けることではありません。一見犠牲になっているように見えても結果的には自分の成長や幸福につながっていることが大切です。利他とは助けることで自分が助かることであり、教えることで自分が教えられることです。多少の労力や時間を費やしても利他を行うことは結果的には自分のためになるのです。目先の利益にとらわれずに積極的に他者を楽しませ、助けてゆくことこそ自分にとって本当の利益となる行いなのです。

「ウパーヤ」学生編集員募集！！

本学の仏教教育広報誌「ウパーヤ」の紙面作りに参加していただける学生編集員を募集しています。仏教、寺院、仏像、巡礼、歴史、日本文化などに興味のある方、また取材や記事の執筆に関心のある方ならどなたでも歓迎します。当然、学科専攻も問いません。

これまで第4面の「聖徳太子のゆかりの地をめぐる」の取材の執筆、およびその取材見学の様子をホームページで紹介するなどの活動をしてきました。また、本学が仏教教育の一環として実施している野中寺での座禅会に参加し、その実施状況をレポートしていただいた

こともあります。

興味のある方、詳しい話を聞きたいという方は、第4面下に記載されているメールアドレスにメールを寄せていただくか、仏教文化研究所の研究員にお声を掛けてください。

ご連絡お待ちしております。

(奥羽 充規)



第 16 回 卒業生インタビュー

話し手: 松浦 華子 (まつうら はなこ) 社会福祉法人大阪福祉事業財団 すみれ愛育館
平成 29 年 3 月 人文社会学部日本学科卒業生

聞き手: 坂本 光徳 (和の精神 I・II 講師・人間福祉学科健康福祉専攻専任講師・本欄編集)



仕事について

大学卒業後に城東区にある福祉型障害児入所施設に就職しました。知的障害がある 3 歳から 18 歳までのお子さんが生活している施設となります。仕事の内容は、生活施設となるので朝の学校への送り出しなど、普通に家で生活する中で働くことを職員がします。一般の児童養護施設と異なり障害があるため、できることが極端に少なかったり、逆に秀でている部分があったりと、非常に波がある子どもたちになります。例えば、服を自分で着る、体を自分で洗う、ごはんのスプーンの使い方など、生活の中で自然と身に着くことが、なかなか身に着きません。しかし、18 歳になれば施設を出て自立することになるので、良い部分は伸ばしつつ、それらのことが自分でできるように職員が支援しています。

入所する子どもたちの大多数が親御さんとの関わりが少なく、十分な愛情を受けてこなかったケースがほとんどです。そのため、否定的な声掛けはしないように気を付けています。もちろん、相手を傷つけたり、命に関わったりすることは、駄目だと注意しますが、それ以外はできるだけ肯定的に捉えるようにしています。

もともと教員を志望していたため、子どもたちが勉強を教えてほしいと言ってくることもあり、大学で勉強したことが生かせることもあります。学校で児童を支援するのも良いのですが、生活の中で支援していきたいという思いが強くなって、就職しました。今の仕事は、子どもと一歩進んだ関わりが持っているといます。

礼拝(和の精神)について

冬学期の写経で集中して字を書くというのが楽しくて良かったです。もともと字を書くのが好きで、少しのことでもメモしますし、今の仕事でも子どもの様子を書くなどの引き継ぎは、手書きでしています。礼拝の中で講話を聴きながらのレポートは、考えながら必死で書けけれども、写経はそれとは違い、無心で写す時間が結構楽しいというか、大事だったと思います。今でも書店で写経の本を見たら欲しくなりますが、仕事で疲れて家に帰るので、写経する時間が取れないと考えてしまいます。授業で、(写経を)できる時間が確保されている。その時間が楽しくて大切な時間だったと、振り返ると思います。

学園訓について

今の仕事に通ずることで、「和」が大切だと思います。私たち職員は家族ではないので、ある程度べたべたせずに距離感をもって関わるとするのが、難しいです。特に幼児などは甘えたい時期ですが、特別その子を可愛がることはできません。また子ども相手といえども人として関わらないといけないという場面も少なからずあります。家族ではない

が、他人でもないという難しい関係の中でも、一緒にご飯を食べている時間や、お風呂に入っている時間、子どもによっては、寝かしつけなどによっては、一緒に空間を過ごしています。それらの家庭的な空間を再現して関わる中でつながり、一つの「和」ではないかと考えています。

また「礼儀」も重要です。家族みたいで家族ではない、職員と利用者の間で必要となります。子どもから親しく関わってくることは嬉しく思いますが、そこで大人に対する礼儀を教えることは難しいです。ただ社会に出たときのことを考えると、入所している時から意識する必要があります。またそれをしっかり継続することはさらに難しくなります。私自身も含めて誰でも継続は難しいので、「礼儀」は意識し続ける必要があります。

在学生へのアドバイス

時間は無限に無いということを伝えたいです。社会人になってからこれをすれば良かった、資格をとれば良かったと結構思います。2 年生の時は暇だったのに全然何もしてなかったと考えたりもします。私自身も、当初は福祉に就職するつもりがなかったので、急いで社会福祉主事のための授業を履修した経験があります。興味のある資格やこれから必要になるだろう英語などをもっとすれば良かったとも思いました。資格を取ろうと思っても社会人になるとまとまった時間がとれません。大学生の間の時間はとても貴重だと今になって思います。だから、興味のあることは取り敢えずやってみてください。遊びたい気持ちはとてもよく分かりますが、実は社会人になってからの方が遊べていると私的には感じています。

特に日本学科の後輩は、色々な就職口があるから他学科の授業も関心のあるものは受けてみてください。私は、4 年生になってから進路を変えたから割と授業が多かったので、同じように授業を取れとは言いません。しかし、これからの仕事に必要なと思う授業がもしあれば、見に行けば良いと思います。4 年生の暇な時間にこそ様々な授業を受けて、これから必要になる知識や学びを蓄える期間として大切にしたいです。同じ授業料を払っているのに週 2 回の授業では、もったいないです。空き時間をバイトに使ってお金を稼ぐことも大切ですが、勉強に使える時間があるのは学生時代ならではの良さだと思います。

令和元年度 冬学期「和の精神 II」講話題目

9月19日	岩尾 洋学長「写経の効果」 藤谷 厚生先生「『ウバーヤ』第 15 号について」 上績 宏道先生「オリエンテーション」 高橋 麻起子学生支援課員「大切な命が一人でも多く救われるように」 米谷 明図書館課員「ビブリオバトルについて」 松井 唯季「ピアサポートセンターのお知らせ」	大久保峻生、北村優弥「ピアサポート相談箱設置について」 高橋 麻起子学生支援課員「世界エイズデーについて」 常森 裕介先生「子どもの人権を考える一親による権利侵害と親子の対話」 仲谷 和記先生「団体献血について」	
10月3日	福光 由布先生「写経の仕方・方法」	12月5日	杉中 康平先生「『学園訓の実践』エピソード入力について」 石田 智大 IR 戦略統合課員「『学園訓の実践』学修ポートフォリオへの入力について」 松井唯季、笠谷綾乃「ピアサポーター募集について」
10月10日	坂本 光徳先生「写経について」	12月12日	「ゼミコンテスト発表」 1位「5Tops」保育・内本ゼミ(五十嵐かのん、手嵐笑里、中野莉奈、畑楠萌、堀田実紀) 2位「Beautiful Life」教健・松本ゼミ(井上笑顔、小野のどか、小谷双葉、中原楓佳、藤原夢乃)
10月17日	南谷 美保先生「写経と『経供養』」	12月19日	原 祐子先生「今日も生きる」
10月24日	李 美子先生「『不肯去観音』について」	12月26日	1位「5Tops」保育・内本ゼミ(五十嵐かのん、手嵐笑里、中野莉奈、畑楠萌、堀田実紀) 2位「Beautiful Life」教健・松本ゼミ(井上笑顔、小野のどか、小谷双葉、中原楓佳、藤原夢乃)
10月31日	篠原さくら、志摩妃佳、脇順二、トウオン パオ、林寿樹「海外体験について」 石橋龍太郎、田中聖、福山鈴乃、前田紗希「オレンジリボン運動について」	1月9日	矢羽野隆男先生 & 浙江工商大学大学院生(江雨寒星・徐悦沁)「留学生の日本体験一異なる視点で見る日常」
11月7日	山本 あい子先生「日本人と呼ばれる外国人だった時の話」	1月16日	上績 宏道先生「まとめ」
11月21日	源 健一郎先生「無常—今を生きる私たちが学ぶこと—古典文学の世界を通じて」		
11月28日	桃尾 幸順先生「利他の精神について」		

聖徳太子ゆかりの地をめぐる

一元興寺（奈良県奈良市中院町）

深紅と黄金の紅葉が鮮やかに深くなる11月、私たち取材班は、奈良県にある聖徳太子にゆかりの深い元興寺（真言律宗）を訪れました。奈良の国宝・世界文化遺産であり、古都奈良の文化財として有名な元興寺は、1300年続く「はじまりの地」として多くの観光客が足を運ぶ、日本の歩みを伝えるお寺と言っても過言ではありません。

今回は、中国の浙江工商大学から四天王寺大学へ交換留学に来ていた3名の留学生も同行し、ともに歴史のロマンを巡る取材となりました。

崇峻天皇元年（588年）、蘇我馬子によって開かれた法興寺（飛鳥寺）は、一基の塔に三つの金堂を備え、金銅でできた釈迦如来坐像（現在の飛鳥大仏）、石でできた弥勒菩薩像、刺繍の仏画をそれぞれの金堂の本尊とした日本最初の本格的寺院です。

その法興寺が飛鳥の地から平城京への遷都に伴い、蘇我氏の氏寺から官大寺に性格を変え、新築移転されたのが、元興寺（仏法元興の場、聖教最初の地の意）です。かつては、南都七大寺の一つとして、立派な建物と広大な寺域をもつ巨大な寺院でしたが、伽藍の荒廃が続く



中、土一揆にも巻き込まれて衰退し、今では極楽堂（国宝）と禅室（国宝）を残すのみとなっています。現在、元興寺境内をはじめ「ならまち」各所に残る巨大な礎石

は、往時の元興寺の雄姿を偲ばせる遺品です。

衰退の中で、命脈を保つことになったのは、日本最初の浄土教の学僧として知られている智光（8世紀）が遺した智光曼荼羅でした。平安時代の後期になり、法隆寺の僧坊の一部が改造され、聖徳太子を祀る聖霊院が造られた頃、この元興寺でも僧坊の一部が改造され、智光曼荼羅を祀る極楽房（現在の本堂）が成立しました。僧坊の一部を改造した極楽房は、極楽堂や曼荼羅堂とも呼ばれ、南都系浄土信仰の中心となっています。



更に私たちは重厚な門構えの福智院（真言律宗）を訪れた後、おりしも開催されていた第71回『正倉院展』（奈良国立博物館）へと歩みを進めました。キャンパスメンバーズの特典を活かし、まるでテーマパークを訪れたような大勢の人で賑わう中、今回は天皇陛下御即位記念「皇室が守り伝えたもの」という特別展ということもあり、歴史の教科書で学んだ「鳥毛立女屏風」をはじめ多くの貴重な展示物に、静かにそして感動をもって見学することができました。

古代から現代一令和の新時代へ、今回は日本の歩みとそれを大切に守る日本人の優しさ、古きに学び未来へ歩むことの大切さを感じた歴史の旅となりました。

（学生編集員：青名麻梨亜）

仏教のことば

りんね
— 輪廻 —

輪廻とは、サンスクリット語の Samsāra[サンサーラ]の漢訳語です。これは、仏教以前からあるインドの思想であり、生まれては死に、また生まれては死にと、あたかも車輪が永遠に廻り巡るように、生死が繰り返されることを意味しています。古来より、我々衆生は無限の時間の流れの中で、様々な世界へと生死流転を繰り返していると考えられているのであり、この様を輪廻転生とも呼んでいます。

我々が生前行った善悪の業の報い（果報）によって、次に生まれる世界が決まるとされます。特に悪業をなした者は、その果報の度合いによって、極苦の世界である地獄道、飢えの苦しみの世界である餓鬼道、また家畜動物の苦しみの世界である畜生道などの三悪趣に生まれて苦悩を受けるとされています。さらにいじめ虐待の苦悩の世界である修羅道、善業の果報によって人間の福徳を受ける人道、天上の神々としての福徳を受ける天道と言った六つの世界に、それぞれ生まれ変わる（六道輪廻）と考えられています。釈尊は、実は輪廻転生の世界そのものが、苦悩に満ちた世界であると考え、そこから解脱して安らかな涅槃の境地に到達し仏陀となりました。それ故、仏教ではこの輪廻世界から解脱することが、究極的な目標とされている訳です。

（藤谷厚生）

編集後記

山本先生は四天王寺から沖縄、インドへと話題を展開され、李先生は中国浙江省普陀山と日本を繋ぐ観音信仰から、日中のあるべき関係について説かれた。学生編集員は元興寺と正倉院展を訪れて、天竺・震旦から本朝に渡来した日本の仏教や文化の「元興」に思いを馳せた。日本という島国は、仏教を通じて世界とつながりあってきたのだ。

仏教の理念は今も受け継がれている。桃尾客員研究員は、大乘仏教の根本精神である利他について説かれた。日本学科から児童福祉の世界に飛び込んだ卒業生のお話からは、日々の生活の中で、和を重んじ利他に励む実践に取り組みしていると窺われた。

世界とつながり、人とつながり、次代へと伝えていくことの大切さ、そのことを考えさせてくれる紙面になった。そうした機縁として当誌が果たす役割を今後も大事にしていきたい。（K.M）

研究所員紹介

所長 岩尾 洋(学長・教授)

主任研究員 藤谷 厚生(教授)

研究員

石田 陽子(教授) 上續 宏道(教授)

源 健一郎(教授) 南谷 美保(教授)

矢野野 隆男(教授) 杉中 康平(教授)

奥羽 充規(准教授) 李 美子(准教授)

坂本 光徳(専任講師) 中田 貴眞(専任講師)

南谷 恵敬(客員教授)

客員研究員 桃尾 幸順

UPĀYA(ウパーヤ) 16号

ウパーヤとは「高い目標へ到達すること」を意味し、漢訳では「方便」となります。

令和2年4月1日発行

発行 四天王寺大学

仏教文化研究所 仏教教育センター

所在地 大阪府羽曳野市学園前3丁目2-1

TEL:072-956-3181(代) FAX:072-956-9940

URL:http://www.shitennoji.ac.jp/

「UPĀYA(ウパーヤ)」に関する
ご意見やご感想はこちらへお寄せください。

E-mail bukken@shitennoji.ac.jp

(件名は「ウパーヤ」としてください)

